



Title	A novel anti-rheumatic drug, T-614, stimulates osteoblastic differentiation in vitro and bone morphogenetic protein-2-induced bone formation in vivo
Author(s)	栗山, 幸治
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43812
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について ご参照ください 。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 くり やま こう じ
栗 山 幸 治

博士の専攻分野の名称 博 士 (医 学)

学 位 記 番 号 第 1 7 7 0 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

医学系研究科外科系専攻

学 位 論 文 名 A novel anti-rheumatic drug, T-614, stimulates osteoblastic differentiation in vitro and bone morphogenetic protein-2-induced bone formation in vivo
(新規抗リウマチ薬 T-614 は in vitro における骨分化、および in vivo における BMP-2 誘導性骨形成を促進する)

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 吉川 秀樹

(副査)

教 授 越智 隆弘 教 授 大 藁 恵一

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

高齢化社会をむかえ、骨粗鬆症に対する治療は重要な問題である。骨形成を促進する薬剤、また将来臨床応用が期待される bone morphogenetic protein の作用を増強する薬剤は骨粗鬆症に対する有効な治療になりうると考えられる。いくつかの薬剤を骨芽細胞の早期のマーカーであるアルカリフォスファターゼ (ALP) の活性によりスクリーニングした結果、T-614 (*N*[3-(formylamino)-4-oxo-6-phenoxy-4*H*-chromen-7-yl] methanesulfonamide) が骨芽細胞の ALP 活性を上昇させることを見出した。T-614 は新規に開発された抗リウマチ薬であり、炎症性サイトカインの産生抑制作用を有し、ラットの関節炎モデルにおいて、関節破壊抑制作用が報告されている。

そこで、本研究では in vitro および in vivo の系を用い、T-614 が骨芽細胞分化および骨形成に及ぼす影響を検討し、その作用機序を明らかにすることを目的とした。

【方法】

in vitro においては、マウス骨髄間質細胞株 ST2 および骨芽細胞株 MC3T3-E1 を用い、T-614、リコンビナントヒト BMP-2 (rhBMP-2) 存在、非存在下に骨芽細胞分化のマーカーである ALP 活性、オステオカルシン分泌、細胞外器質石灰化を測定した。さらに、BMP の細胞内シグナル伝達物質である smad5 のリン酸化を Western blot で、また BMP に直接その発現が制御されている Id1 の発現を Northern blot により検討した。また、骨芽細胞の分化に必須の転写因子である Cbfa1 と Osterix の発現についても Northern blot により検討した。さらに構造活性相関を検討するため、炎症性サイトカインの産生抑制作用を有さない不活性な化合物を用いて、ALP の活性に及ぼす影響を検討した。in vivo においては、rhBMP-2 を含浸させたコラーゲンペレットをマウス広背筋筋膜下に移植し、T-614 を経口投与群と非投与群とで、異所性に形成された骨を X 線、カルシウム含量、組織学的に検討した。

【成績】

in vitro においては、T-614 は、rhBMP-2 存在、非存在下において、ST2、MC3T3-E1 とともに ALP 活性、オステオカルシン分泌を上昇させた。その効果は ST2 の方でより強く認められた。また ST2 では、rhBMP-2 存在下に T-614 は細胞外器質石灰化を約 14 倍促進した。T-614 は smad5 のリン酸化、Id1 および Cbfa1 の発現には影響を及ぼさなかった。一方で T-614 は ST2 において、rhBMP-2 存在下に osterix の発現を約 3 倍上昇させた。炎症性サイトカインの産生抑制に対し不活性な化合物でも ALP 活性の上昇が認められた。in vivo においては、T-614 経口投与群では、コントロール群に比べ、カルシウム含量が約 1.7 倍の大きな骨が形成された。新たに形成された骨の組織学的な差は認めなかった。

【総括】

本研究により、T-614 が骨芽細胞分化、および BMP-2 誘導性骨形成を促進していることを見出した。その作用機序として、炎症性サイトカインや BMP のシグナル伝達に直接関与するのではなく、骨芽細胞分化に必須の転写因子である osterix の発現を上昇させることによるものと考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は新規に開発された抗リウマチ薬である T-614 (*N*[3-(formylamino)-4-oxo-6-phenoxy-4*H*-chromen-7-yl]methanesulfonamide) が骨芽細胞分化、骨形成促進作用を有することを新たに見出した。その作用機序については検討したところ、T-614 は smad5 のリン酸化や Id1 の発現を変化させず、Bone Morphogenetic Protein (BMP) のシグナル伝達には直接関与していないと考えられた。一方、骨芽細胞の分化に必須の転写因子である Cbfa1、Osterix の発現の検討では、T-614 は Cbfa1 の発現は変化させなかったが、Osterix の発現は有意に上昇させた。このように T-614 は Osterix の発現を上昇させることにより、骨芽細胞分化、骨形成を促進したと考えられた。T-614 は炎症性サイトカイン産生抑制作用や、cyclooxygenase-2 (COX-2) 阻害作用、関節炎モデルでの関節破壊抑制作用などが報告されているが、骨形成促進作用を示した本研究結果は全く新しい知見である。このように T-614 は骨吸収抑制作用と同時に骨形成促進作用も有する可能性がある。今後の十分な検討を要するが、T-614 がリウマチ患者を含め、骨粗鬆症患者に対して有効な治療薬となり得る可能性を示唆するものであり、臨床応用においても非常に興味深い研究結果であり、本研究は学位論文に値するものと認める。